

10月6日ゼミは開催します

当日は、会場の都合で6日(日)となります。

神社の向きが示すヤマト王権の誕生

—10月6日ゼミ紹介文：槌田鉄男会員記

1. 神社の雑学

神社の起源の一つとされるものに縄文時代から祀られてきたとされる磐座があります。多くの磐座は注連縄で囲まれており、それは神域と俗界とを分けるものとされています。一方、鳥居も同様の役割があります。鳥居は韓国や東南アジアの赤族などにもありますが、それは家や陵などの入り口にあるものであり、神社のような宗教施設に附属するものとは少し異なるように思われます。調べてみると満州族の家の入口に設置されたものが形状的には日本の鳥居に一番近いようです。満州族は扶余の末裔です。これらのことを自説の“新しい騎馬民族説”で考えると、元々あった磐座のような宗教施設に扶余到来後、注連縄に加えて鳥居を設けたのが神社と言うこととなります。

2. 神社の向きが示すその由来

多くの神社が南向きなのは平城京や平安京などの都城が南向きであることに由来しています。南向きだと北向きに拝礼することになり、それは北極星つまり天皇を拝むこととなります。しかし、南向き以外の神社も多数あります。例えば大阪の住吉大社のご祭神は海を渡ってやって来たと言われ拝殿は西向きで韓国釜山近くの大成洞遺跡を向いているように思われます。福岡県の宗像大社の拝殿は三柱のご祭神の中の一つ田心姫神が祀られている沖ノ島の方向を向いています。武蔵一之宮・氷川神社はスサノオを祀る出雲系の神社ですがその拝殿は皇居の江戸城天守閣跡を向いています。そしてそれに続く“への字型”にやや曲がった参道は長さ2kmで日本一ですが日光東照宮を向いています。

そして日光東照宮の拝殿は氷川神社を向いています。なぜ出雲系の神社が江戸城や日光東照宮と関連付けられているのか、それは徳川家康が氷川神社を造営したことに起因していると考えられます。今回それら以外にも諏訪大社、熊野大社など様々な神社の方向が意味するものについて考えてみました。

3. 神社の向きが示すヤマト王権の誕生

—小呂島はオノゴロ島か

福岡市在住の淤能碁呂太郎氏(本名山口哲也氏)は玄界灘に浮かぶ周囲3.3km人口150人あまりの小呂島の小中学校にかつて赴任していた理科の教諭です。彼は対馬暖流が流れるその島にビロウの木が自生していることに着目しました。ビロウは南洋性のヤシ科の植物であり、その北限は沖の島です。それは皇室と密接な関係があり、仁徳天皇の歌には国生み神話で最初に作られた淤能碁呂島の名前とともにビロウの古名アジマサの名が出てきます。つまり淤能碁呂島はビロウが生えていた島の近くにあったこととなります。しかし、一般的な淤能碁呂島の候補である瀬戸内海の島々にはビロウが自生する島はありません。そして彼は九州の古い神社がこの小呂島を向いていることに気づきました。これらことからこの小呂島こそ国生み神話で最初に作られた淤能碁呂島であり天孫族(渡来人)が最初に上陸した島だと考えたのです。私も興味を抱き確認すると例えば宇佐神宮に繋がる参道・勅使街道が小呂島を向いています。つまり天皇の使いは小呂島の方向から宇佐神宮を目指すこととなります。さらに対馬の和多都美神社など九州のいくつかの古い神社が小呂島を向いています。また宮崎県の生目古墳群の九州最古級の古墳や西都原古墳群の中で国内最大の帆立貝形古墳・男狭穂塚古墳までもが小呂島を向いていました。しかし、それだけではありません。博多駅から真つすぐ西北方向に延びる福岡市内最大の大通り『大博通り』や西鉄高

宮駅前を通る『高宮通り』など周辺の道路が小呂島を向いているのです。そして奈良に目を向けると神社の原型とも言われている纏向遺跡の大型建物群や日本書紀で最も古いとされる石上神宮までもが小呂島を向いていました。石上神宮は左右に3つに枝分かれした七支刀で有名ですが私が公孫恭がもたらしたと考える中平年号の入った鉄刀が出土した東大寺山古墳のすぐ近くにありす。ここは初期ヤマト王権で葛城氏と共に勢力を二分したワニ氏の領域です。

果たしてこれらのことは何を意味するのでしょうか。私にはヤマト王権を作った扶余が九州本島上陸前に最初に占拠したのが小呂島であり、その後造営した神社を小呂島に向けたのだと思えます。ちなみに小呂島と博多湾に浮かぶ能古島を足すとオノコロ島になります。出来すぎでしょうか。(完)

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

古を生きた磐之媛：第1部

—青柳 祥子会員記—

「古事記」「日本書紀」には数多の女性が登場するが、なかでも五世紀初頭の仁徳天皇の皇后磐之媛(イワノヒメ)は素晴らしい存在感を放っている。

イワノヒメの嫉妬深さは並外れており、天皇が後宮に妃を迎えることを許そうとはしなかった。この時代は一夫多妻の時代だったから、天皇はさほどの事とも思わなかったであろうが、イワノヒメは夫の浮気の噂を耳にすると、足を踏みならして悔しがったと記されている。イワノヒメのリアクションは率直そのもので可愛らしくも思える。

ある時、天皇はイワノヒメの目を盗んで吉備の美しい娘クロヒメを宮の内に入れたことがあった。クロヒメはイワノヒメの嫉妬深さを知っていたから心落ち着かず、早々に国元に引き揚げようとしていた。クロヒメが舟を仕立てて発とうとしていることを知った天皇は、

「美しい娘が小舟に乗って国へ帰ってしまう」と歌い掛けた。

この歌を聞きつけたイワノヒメは、クロヒメを舟

から降ろし、徒歩で吉備に追いやった。天皇はあとを追って吉備まで出かけたというのだから、やはり大っぴらに浮気はできなかったのだろう。

秋九月、皇后は熊野に出かけることがあった。神事後に天皇が催す宴席で使う御綱柏の葉を採集するためだった。御綱柏は葉先が三つに分かれている大ぶりの葉で、酒を盛る盃として重宝されていた。御綱柏を積んだ船が宮の在所の難波に戻る途次、イワノヒメは留守中の天皇の行状を耳にした。天皇はかねてより異母妹の八田皇女を後宮に入れたいと思ひ皇后に再三了解を求めていたのだが、その都度突っぱねられていた。そこで天皇は皇后の留守を幸いに八田皇女を宮に呼び入れ、昼夜となく戯れているという。

「皇后はご存じないので、のんびりと船出なさっている」と、もっぱらの噂になっているというではないか。

イワノヒメは、裏切られた思いに深く傷つき、採ってきた御綱柏をすべて海に投げ捨てると、宮に向かう港を素通りして、難波の堀江から山背川、さらに木津川へと船を進ませた。宮へ帰る気持など失せてしまったのだ。

イワノヒメは目の前を過ぎてゆく景色を望みながら歌っている。

つぎねふ 山背川を 河のぼり 我がのぼれば
川隈に 立ち栄ゆる

百足らず 八十葉の木は 大君ろかも
山背川を遡ってくると川の曲がり角には葉の繁った立派な樹が立っています。その立派な姿はまるで大君とそっくりです。といった歌意で、歌には夫への想いが込められている。

イワノヒメは木津川までたどり着くと、陸路をとり奈良山を越え大和へ向かった。奈良山を越えるとき実家のある葛城を遠く望んで、また歌っている。

つぎねふ 山背川を宮のぼり 我がのぼれば
青丹よし

那羅を過ぎ 小楯 倭を過ぎ 我が見が欲し
国は 葛城高宮

我家のあたり
難波宮を後にして山背川を遡り、奈良山を越え小楯、大和を過ぎると葛城が見えます。私が見たいのは、葛城の高宮にある私の実家のあたりです。

といった歌意で、故郷を懐かしむ彼女の気持が実

感として迫ってくる。

葛城の高宮には父親の葛城ソツヒコの館があるが、自分はこのまま実家に帰ることはできない。イワノヒメは別居を決心して此処までやって来たものの、皇后である以上、自分一人の気持で事を運べないことを承知していた。このまま実家には戻れないけれど、せめて少女時代を過ごした家のあたりだけでも見たい、と胸の内を歌っている。

その後、イワノヒメは「古事記」によると筒木の韓人ヌリノミの家に入ったとある。

筒木は現在の京田辺市のあたりをさし、当時は百済からの渡来人が多数居住していたという。

イワノヒメがなぜ百済人ヌリノミの家を受け入れてもらったのか定かではないが、朝鮮半島と深く関わっていた父、葛城ソツヒコの存在を措いては考えられないことだろう。

葛城氏は奈良盆地の南西、金剛・葛城・二上山麓一帯に割拠した大きな豪族である。五世紀の初頭にヤマト王権が河内に都を定めると、王権と姻戚関係を結んで勢力範囲を伸張させている。ソツヒコは葛城氏の祖先とされ、「古事記」では長江の曾都毘古と記されている。長江は現在の奈良御所市のあたりを指し、一帯は五世紀初頭は高宮郷に含まれ、イワノヒメが歌った『我が見が欲し国は 葛城高宮 我家のあたり』に当たる。

葛城ソツヒコは朝鮮半島の加耶南部と関係が深く、半島と直接交渉ができる族長として、ヤマト王権の対外交渉係のような存在であった。半島との関係は王権にとっても葛城氏にとっても、常に気を緩めることのできないものだったのであろう。

四世紀から五世紀にかけて朝鮮半島の北部から中国吉林省のあたりは高句麗の領土で、広開土王の南下政策が始まると、百済や新羅は高句麗からの侵略の脅威に直面した。

百済は援軍を倭国に求め、援軍の将となったのがソツヒコだった。高句麗は更に南へと兵を進め加羅国まで至ったので、追い詰められた人々は次々に海を渡って倭国に逃れて来た。ソツヒコは援軍の将として、逃れて来た渡来人たちの倭国での生活とも深く関わっていたと考えられる。

イワノヒメが自分の受け入れ先として韓人ヌリノミを選んだということは、おそらく父親とヌリノミが親しかったからだろう。イワノヒメも以前から

ヌリノミの人柄を知っていたのかもしれない。

イワノヒメの実家、高宮あたりにも多くの渡来人が住んでいた。彼らは新羅からソツヒコの捕虜として連れて来られた人々で、葛城山麓の四つの邑に住まわされ、高宮はその邑の一つだった。

邑には武器製造工房、織物工房、アクセサリ工房など、半島の人々によってもたらされた先端技術や高度な文化が溢れていた。当時倭国はまだ鉄の製錬技術を持っていなかったが、半島からの人々の流入によって、鉄器を得ることも可能となった。葛城氏がソツヒコの時代に巨大な勢力を得たことと、この四つの邑の渡来人集団を切り離して考えることはできない。イワノヒメは物心ついた頃から、このような古代テクノポリスの只中で育ったのである。

十月、イワノヒメが家出をしてからひと月後、皇后が山背からさらに北へ向かったことを知った天皇は、慌てて臣下に歌を持たせて後を追わせた。

大雨の降る日、ようやくヌリノミの家に着した臣下は、イワノヒメに天皇の歌を捧げようとしたが顔を拝することすらできなかった。彼が正面口に腹這って進むと、皇后は裏口から外へ出てしまう。裏口に腹這い進むと今度は正面口から外へ出てしまう。

天皇の御歌

つぎねふ 山背女の 木鋏持ち 打ちし大根
根白の 白腕 まかずけばこそ 知らずとも
いわめ

山背の女が木の鋏で畑を打って掘り起こした大根。その根のように白い腕を交わさずに来たというのなら、知らないと言ってもいいけれど（知っているだろうに）。

互いに腕を交わし合った仲ではないか、機嫌をなおしてくれてもいいではないか。

と歌っているのだが、イワノヒメは聞く耳をハナから持っていなかった。

折からの大雨に腰までぐっしょり濡らしながら、臣下も天皇の使いの役目を果たすべく必死だった。臣下の妹がイワノヒメに仕える侍女だったので、妹は涙ながらに兄と会ってくれるよう皇后にお願いした。妹の心はイワノヒメにも伝わったはずだが、返ってくる言葉は毅然としていた。

「お前の兄に速やかに帰るように言いなさい。私は宮には戻りません」

臣下はなす術もなく高津の宮へ帰った。
翌十一月、天皇はいよいよ自ら出向いてイワノヒメを連れ戻そうと、難波から船を仕立てて川を遡った。その途次の歌、

つのはさう 磐之姫がおほろかに 聞こさぬ
末桑の木

寄るましじき 河の隈隈 寄ろほひ行くかも
末桑の木

皇后は並大抵のことでは自分の言うことを聞き入れてくれない。思い通りにはいかないものだ、といった歌意。翌日、ヌリノミの家に到着した天皇は早速皇后を呼び出したが、イワノヒメは会おうともしなかった。仕方なく天皇は歌詠みをした。

つぎねふ 山背女の 木鋏持ち 打ちし大根
さわさわに

汝が言へせこそ うち渡す やがはえなす
来入れ参来れ

山背女が木の鋏で大根を掘り起こすと大根の葉っぱはざわめくが、あなたもあれこれ言うので、私が大勢引き連れてこうしてやって来たのです、といった歌意。何か押しつけがましい^{古代史}歌に思えるが、天皇にしてみれば、自ら出向いても会ってくれない皇后に腹を立てながらの立ち往生だったのだろう。

イワノヒメは人を遣わして天皇にこう申し上げた。

「あなたは八田皇女を宮に入れ妃となさった。私は八田皇女の副え物としての皇后であることなど断じてできません」。二度と高津の宮には帰らない決心をしていたイワノヒメは、天皇が^せやして来よーうと何であろうと、気持を変えることはなかった。天皇はなす術もなくまた川筋を戻って行ったのだが、おそらくこれ程の扱いをされるとは思ってもいなかったであろう。続。

2025年ゼミ(4月以降の日日は予定)

1月11日:「邪馬台国は宮崎市にあった」。「邪馬台国宮崎市説・欠史八代説・神武崇神同一説からヤマト王権の成立を考察する」—土田 章夫会員

2月1日:蘇我氏の祖は百済王族か?

—飯田 真理会員

3月1日:5世紀から7世紀迄の朝鮮半島と倭国の交流—永井 輝雄会員

4月5日:武蔵の古代史—小川 孝一郎会員

5月3日:日本語の源流—磐城 妙三郎会員

6月7日:最北の歴史 北海道 擦文・アイヌ文化—
倉重 千穂会員

7月5日:女王の国々と狗奴国について考える
Version II—槌田 鉄男会員

8月は休講(猛暑予想の為)

9月6日:藤原 不比等の足跡—藤田 一郎会員

10月4日:秘仏とは何か、又は出羽国置賜地方の
古墳群—米野 博会員

11月1日:古代国家の成立 II:倭国から律令国
家へ—齊藤 潔会員

12月6日:鉄の古代史:最近の話題—市川 達雄
会員

以上。

次回11月2日ゼミ・テーマ

古代国家の成立 I:ヤマト王権から倭国へ
—齊藤 潔会員—